

飛鳥資料館の新営工事

飛鳥資料館

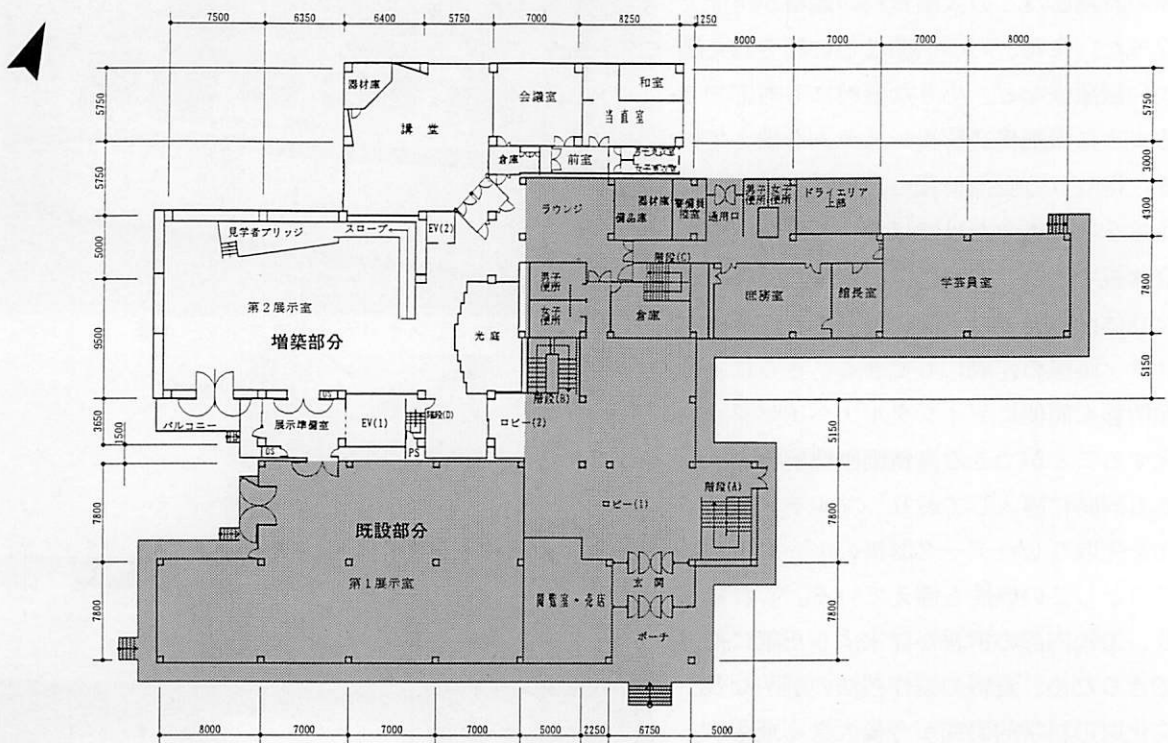
1 増築の趣旨

1975年に開館した飛鳥資料館は、この地域の歴史環境を総合的に紹介する博物館として重要な役割を果たしている。これまで積み重ねられてきた考古学研究の蓄積と、日常的に進められている発掘調査の成果とをふまえた春・秋の特別展・企画展は、そのユニークな企画と分かり易い内容とで、一般の観覧者や研究者の注目を集めてきた。飛鳥地域の文化財保護の上からも、それを底辺から支える大勢の人々の遺跡への理解をひろめるという面からも、飛鳥資料館の事業の持つ意味は大きいといえよう。館を訪れる人の数も次第に増加し、年間平均20万人にせまるようになり、開館以来の累積入場者の数も300万人を超えている。このような状況のなかで、本来それほど大勢の観覧者を予想せず、また、大規模な特別展示も計画にいれずにつくられた資料館の建物は、社会的要請に十分応えられなくなっていた。

主な問題点を列挙すれば、

- 1) 常設展示室が狭く、増加する発掘資料、遺構模型の置き場所がない。とくに貴重な文化財として各方面から公開を求められている、山田寺の回廊建築部材の復元展示に対応できない。
- 2) 特別展を開催するための専用のスペースがない。
- 3) 講堂に十分な収容能力がなく、公開講演会で全聴講者の席が用意できない場合が多い。
- 4) 学芸室、書庫が小さく展示準備室もないという状況で、館の日常業務の遂行、図書等の参考資料の収納、展示のための作業に困難がともなう。

等々があり、このような支障を解決するため展示室の拡張を中心として、館の増・改築が実施される



飛鳥資料館 1階平面図

2 工事内容

付図に示したように、既存の建物を北西部に広げる形で、地上1階、地下1階の施設をつくる。ここには第二、第三の新展示室、展示準備室、資料整理室、講堂、会議室および機械室等が置かれる。増設部の建築面積は978㎡、延べ床面積は1,688㎡。完成後の建物延べ床総面積は4,276㎡となる。増設工事にともなう既存部分の改修もおこなう。改修内容は収蔵庫については内装アスベストの除去および扉の付け替え。さらに現展示室の床および天井の改善。書庫の移動。庶務室、学芸室の改装などがある。

設計は半澤重信氏をチーフとして、公建設計がおこない、施工監理は近畿地方建設局、実際の工事は村本建設を主体とする3社が受け持ち、改修工事の一部については松塚建設が担当する。

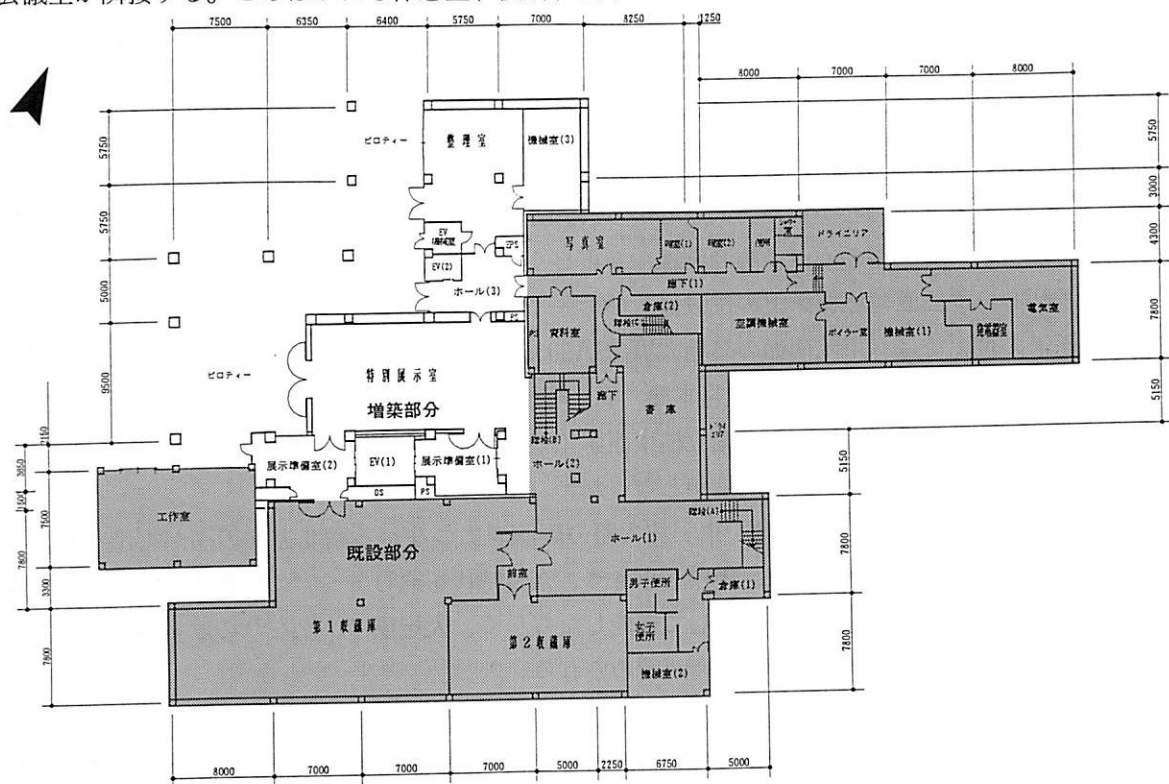
工事期間は1993年7月10日から1994年4月30日。既存部改修の作業のため1993年12月6日から1994年6月30日の期間は休館を余儀なくされることとなった。

3 施設説明

第二展示室は一階にある。広さは317㎡で、最終的には山田寺の出土部材を使って東回廊の3間分を復元展示する。出土部材の保存処理が完了するまでは、実大の基壇模型を置き、回廊の発掘状況を再現する予定。展示準備室と荷物運搬用リフトが付属する。

第三展示室は168㎡で地下、第二展示室の真下におく。収蔵庫および外部ピロティーに直接通じる扉を持つ。これは、おもに特別展示を目的とするためで、展示資料の移動の便を考えた配置になっている。ここには部屋を三つに区切れるような形で移動壁を設置する。第三展示室北には資料整理室144㎡があって、遺物整理と図面などの資料収納のスペースとなる。

講堂は一階西北隅にあり、広さ133㎡。畝傍山、二上山を望む西側を眺望する窓をもつ。入り口前にラウンジがあり、車椅子に対応したエレベーターがここに付く。講堂東側に移動壁で区切った43㎡の会議室が隣接する。このほかにも休憩室、便所、地下ホールなどが設けられた。(岩本圭輔)



飛鳥資料館 B1階平面図